シーワールドのアニマル達

●「おでこ」に人気、コブダイ

コブダイはタイの名が付いているのでタイの仲間と思われがちですが、実はベラ科の魚です。茨城県および新潟県以南に分布し、沿岸の岩場にすんでいます。

コブダイの特徴はおでこにある大きなコブで、メスもオスも成長に伴なって大きくなります。コブダイの顔つきをよく見ると、おでこのコブの他に、くちびるが厚く、下あごがふくらみ、そして上下8本の前歯でどことなく人間の顔に似ています。そのためか、特にコブが大きくなるオスのコブダイはお客様の人気者です。

コブダイは磯根になわばりをもつ魚で、また繁殖期には同じ大きさのオスと争う習性があり、弱いオスは傷つけられてしまうこともあります。

水槽の中にいる時のコブダイは魚礁の中や岩かげにいることが多いのですが、時おり泳ぎまわるようすは「水槽の中のボス」というような貫禄さえうかがわせます。今まで平然と泳いでいた他の魚たちがコブダイが通る道をあけるかのようにサッと逃げるシーンがしばしば見られます。また餌の時間には係員が水槽のそばに立つと、まっ先にコブのあるおでこを水面上に出しながら近づいてきます。そんな時は、話しかけてみたくなるほど人なつっこく、なかなかかわいいものです。

このような体つきや動作に独特な雰囲気をもっているコブダイは、今やシーワールドのスターの一員ともなっている魚ですので、外形だけでなく泳ぎ方や他の魚との関係もよく見て下さい。

（森）

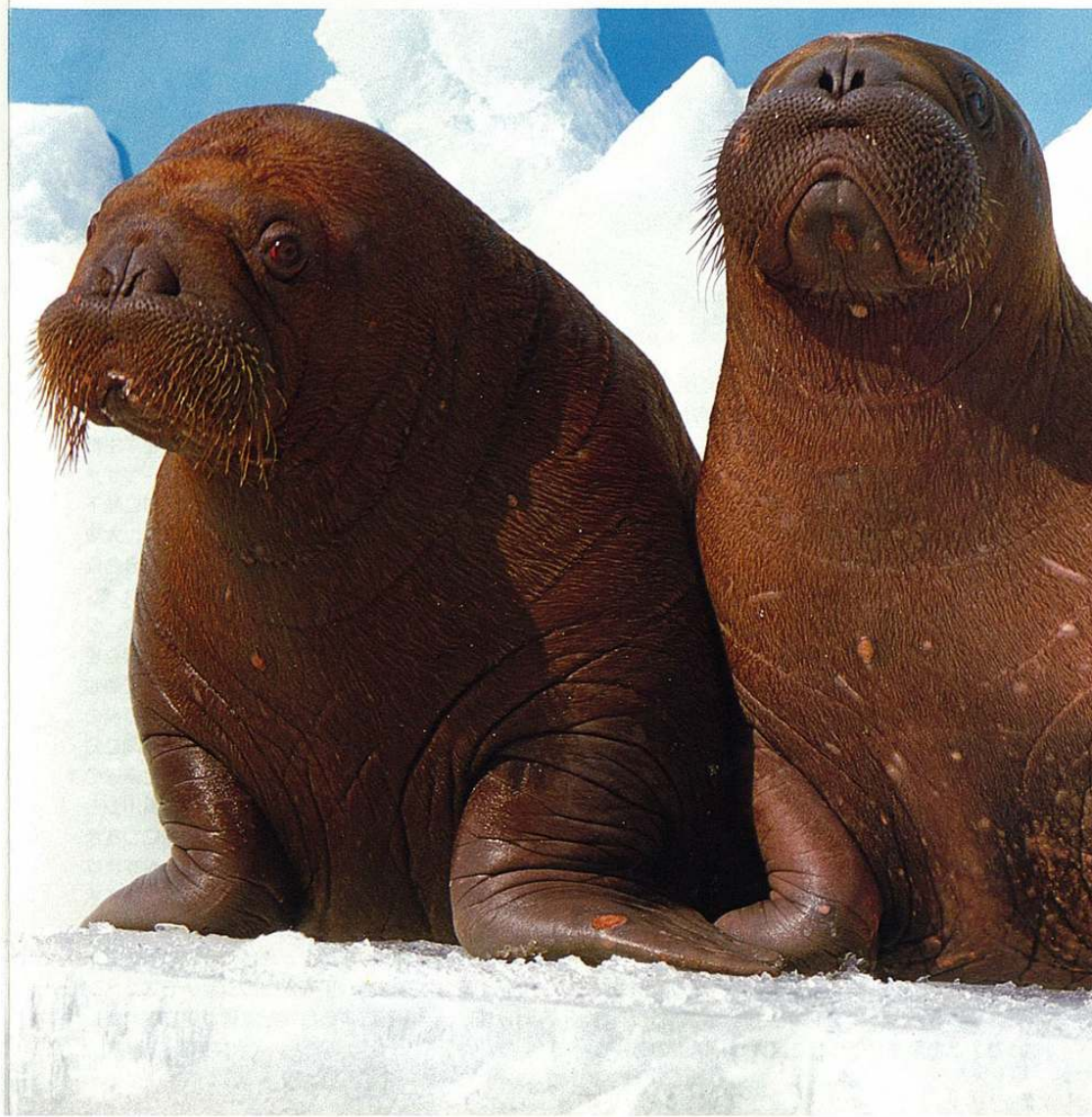
▲コブダイ *Semicossyphus reticulatus*

●アゴヒゲアザラシ

日本の周辺には、ゴマフアザラシ、ワモンアザラシ、クラカケアザラシ、ゼニガタアザラシ、アゴヒゲアザラシの５種類のアザラシが生息しています。このうちアゴヒゲアザラシは生きて捕獲する機会が極めて稀で、幻のアザラシと言っても過言ではありません。昭和58年５月、北海道の紋別で偶然に捕獲され、当館にやって来たのが、今回ご紹介するオスのアゴヒゲアザラシ「グレート」です。アゴヒゲアザラシは名前の示すように、長いヒゲが多く（約200本）生えているのが特徴で、日本周辺のアザラシの中では最も大きく、体長2.2m、体重 250kgにもなります。また前アシの形が円くなっている事や、乳頭が４つある（他のアザラシは２つ）など、他種とは違った特徴をもつアザラシです。

グレートは、はじめ体長123cm、体重87kgでしたが、約１年後の現在では体長155cm、体重114kgにもなりました。からだは大きいのですが、まだまだ子供のアザラシです。冬の間はアザラシプールで展示していましたが、暑さに弱いと言われているため、気温の上りはじめる春から、冷房完備のセイウチプールでセイウチ君と同居させ飼育しています。このグレートが加わり、当館は日本で唯一、日本に生息するヒレアシ動物の全種類を飼育した事になります。まだあまり知られていないアゴヒゲアザラシをより多くのお客様に御覧いただくと共に、不明な点の多いこのめずらしいアザラシの生態や能力を調べてゆきたいと考えています。

（荒井）

▲アゴヒゲアザラシ *Erignathus barbatus*

さかまた No.23 （禁無断転載）

編集・発行 鴨川シーワールド

〒296 千葉県鴨川市東町1464－18
☎(04709)2－2121

発行日 昭和59年７月

さかまた

鴨川シーワールド NO.23

～行幸の栄誉に接して～

天皇、皇后両陛下には、昭和59年2月22日から24日までの3日間、南房総へ3度目の行幸啓あそばされ、鴨川シーワールドは初日、2月22日に天皇陛下のご来臨の栄誉を賜わりました。

当日、特別列車で定刻の午後1時すぎ、安房鴨川駅にご到着になり、ご料車で太海フラワーセンターへ向かわれました。春の早い南房総で、花の香りを楽しまれたあと、天皇陛下おひとりで、鴨川シーワールドのご視察をいただきました。

午後3時6分すぎご到着、曇り空から薄日のさしはじめた中を出村徳衛社長、山本邦介会長、鳥羽山照夫水族館長をはじめ職員の奉迎にこたえられつつ、社長のご先導により、ベルーガの水中ショーが演じられるマリンシアターへ歩を進められました。ご着席後、社長より行なわれました当館の概要説明に対し、陛下におかれましてはご熱心にお聞き頂き、「今後共、社会教育のために一層の努力を望みます」との異例のお言葉を賜わりました。その後、水族館長の御説明でベルーガの水中ショーから御視察いただき、臨席した市内の幼稚園児たちとご一緒に、シャチ、イルカのショーを楽しまれました。陛下から「どう、おもしろかった」とお声をかけられた園児が、緊張のあまりただこっくりとうなずくひとコマもあり、とてもなごやかな雰囲気でした。

つづいて、シーワールド内にある国際海洋生物研究所ではクラゲの仲間のヒドロ虫類やトラザメの卵を顕微鏡でご観察いただきました。特に陛下のご専門であられるヒドロ虫類については、大変ご関心を持たれたご様子で、予定時間を15分も延長し、関係者をとまどわせる一場面もありました。また、水族館本棟のパノリウムではマンボウ、タチウオをはじめ、各種の日本近海産水族や国立極地研究所から委託飼育中の南極産水族等をご熱心にご視察になられました。ご出発前はご先導役の社長、ご説明役の水族館長をはじめ職員一同に対し暖かい労いのお言葉を賜わり、職員のご奉送の中を、当日の宿舎へとむかわれました。鴨川シーワールドとしては、今回の天皇陛下行幸につきましては真に栄誉のことであり、今後共、ますます内容の充実をはかり、皆様に愛され親しまれる水族館にしていかなければと、あらためて、心に誓った一日でもありました。そして、この栄誉を末永く記念するため、正面入口のシャチモニュメント前に、自然石による行幸記念碑が建立されました。

（水族館長　鳥羽山）

▲めずらしいアマゾンカワイルカをご見学になられる陛下。

▲天皇陛下行幸記念碑。

▲日本近海産水族をご見学になられる陛下。

▲シャチ、イルカショーを楽しまれる陛下。

▲幼稚園児に声をおかけになられる陛下。

北海の使者セイウチ君登場！

昭和58年12月8日、ソ連国営航空のエアロフロート機が成田に到着しました。この飛行機には、新しく鴨川シーワールドに仲間入りする2頭の「北海の使者セイウチ君」が乗っていました。

関係者が見守る中、モスクワからの長旅にもかかわらず無事シーワールドに到着したセイウチは、体長125cm、体重96kgのオスと、体長127cm、体重99kgのメスで、共に1才未満のまだ、子供のセイウチでした。幼獣のためセイウチの特徴の1つである大きなキバは、まだ見られませんでしたが、口の中には1cmぐらいのかわいいキバが生えていました。好物の貝のむき身やイカ、エビ、魚の三枚おろしなど種々のメニューを用意したり、飼育場に氷をいっぱい敷きつめ、ふるさとの氷海のムード作りをしたりして歓迎の準備をしていましたが、2頭のセイウチは新しい環境にとまどっているのか、エサや氷には見向きもせずクリクリしたまん丸い目をキョロキョロさせて、あたりの様子をうかがいながら時々、ワンワンと犬の鳴き声のような声を出し、メスとオスが寄り添って動きまわっていました。翌2日目の朝になると、もうすっかり新しい飼育場にもなれたのか、係員がさし出すエサを吸い込んでたべるようになりました。日増しに食欲も増してきて、係員のスキを見ては、エサの入ったバケツに顔を突込んでたべ始め、終るまでバケツを放さないようにさえなりました。たべ終り、バケツから顔を上げた時には、400本近いヒゲのまわりにエサのカスがいっぱいついていて、「いたずら坊主」のようなユーモラスな顔に変身していました。こうして、3ヶ月後には、オス体長140cm、体重131kg、メス体長143cm、体重151kgにも成長しました。セイウチは、寒い氷の海に生息している海獣ですから、春から夏にかけて急に暖かくなる日本の気候では周年、屋外で飼育することが困難です。そこでセイウチ専用の気温、水温が調節できる室内飼育場を準備することとし、3月15日完成し、3月18日早朝引越しがおこなわれ、この日から新居での一般公開が開始されました。新しい飼育舎では、気持良さそうにプールの中を泳ぎまわり、遊び道具として入れた浮輪、浮玉、ビニールホースなどを使って良く遊ぶことが見られました。また、ベッドを用意したところ、2頭でおし合いながら仲良くベッドで寝ていることも見うけられるようになりました。係員にも良くなれ、係員のヒザの上で寝てしまうことさえ、しばしばありましたが、あまりにも重いので、最近では係員の方からえんりょさせてもらっています。春休みからゴールデンウィークにかけ、2頭のセイウチの愛称を募集したところ、たくさんの方々からの協力を得ることができ、その中からオスは「タック」、メスは「ムック」と名づけられました。セイウチは成長すると体長3.6m、体重2トンにもなり、キバは最大1mの長さにもなります。セイウチの飼育の歴史は、1608年イギリスで初めて飼育され、現在では6ヶ国（アメリカ、ソ連、西ドイツ、オランダ、デンマーク、日本）12園館で飼育されていますが、シーワールドでも新しく仲間入りしたこのセイウチたちをこれからも大切に飼育し、成長した姿を皆様に見ていただくよう、係員一同努力してゆくつもりです。

（平塚）

▲ようこそシーワールドへセイウチ君無事到着。

▲赤ん坊のようにミルクを飲んでスクスク育つ。

▲食事のあとはイタズラ坊主の顔に変身。

▲新しい飼育舎は冷房完備。

▲アゴヒゲアザラシも仲間入り。

▲オス「タック」、メス「ムック」に決定。

●ワッペン列車ベルーガ号

5月13日と5月20日の両日、ワッペン列車「ベルーガ号」が運転されました。この列車は、春の一日をシャチやイルカなど海の動物達や、太平洋をバックに咲き誇るユリやガーベラなどの花々を見学してもらおうと、千葉鉄道管理局が企画した日帰りツアーです。列車名は当館の人気者「ベルーガ」より名付けられたもので、両国駅を7時37分出発。車内では、抽選会なども行なわれ、和気あいあいとしたムードでした。シーワールド到着時にはシャチやベルーガ、セイウチ等のぬいぐるみが出迎え、参加者全員に記念品がプレゼントされました。シャチ・イルカショーをはじめ、ベルーガショー、水族館などを見学した後、鴨川発15時33分で全員無事楽しい思い出を胸に、それぞれの家路につきました。（村田）

●オキナエビスの展示

4月12日、東京湾富山沖、水深80mの海底にしかけた手島照雄さんのヒラメ網に殻の高さが7cmほどのオキナエビスがかかり、当館に搬入されました。オキナエビスの仲間は、3億年もの昔に繁栄した巻貝で生きた化石としても知られ、現存する巻貝の内最も原始的な特徴を残しているものです。日本近海からは5種類ほど発見されていますが、いずれも採集数が少ないことから貝類研究家のあこがれの貝として探し求められています。またオキナエビスは、日本で最初に発見された明治9年に40円（現在の約100万円）という大金で大英博物館に引取られたため、長者貝とも呼ばれています。この話題が多く、学術的にも貴重な貝を多くの人に見ていただこうと、4月28日から展示を始めました。（津崎順）

●一宮海岸で保護されたオットセイ

昨年12月24日に千葉県一宮海岸でオットセイの幼獣が保護されました。釣人が波打ち際でぐったりしているのを発見したもので、かなり衰弱していました。このオットセイは、警察の配慮でシーワールドに運び込まれましたが、体長68cm、体重5kgのメスで、前肢にスリ傷があり、目は白内障を患っていて、ほとんど視力がありませんでした。オットセイは、国際条約で捕獲が禁止されていて、許可無く保護することもできないため、水産庁へ連絡し事情を説明したところ、「体力が回復し元気になったら海に放して下さい」と言われ、一時あずかることにしました。かいほうのかいがあって、今では小魚も自分で食べられるようになりました。早く目も治り、海に返す日が来るのを心待ちにしています。（毛利）

●「潜水艇ドルフィン2000」

ミズクラゲやイバラタツなど変わった生態をもつ生物を集めて展示している置水槽コーナーは、ゴールデンウィークをひかえた4月末に模様変えされ「潜水艇ドルフィン2000」と名付けられました。西暦2000年の未来の海底バスの中から海中を観察するようなムードを作り出し、サーチライトを操作してカニをさがす水槽や周期的に大波が押し寄せて来る水槽など、楽しく遊びながら生物の生態が学べるように工夫され、特に磯波の観察水槽では波にもまれてもじょうずに岩場に隠れる小魚や岩にしっかりつかまっているカニとイソギンチャクの様子などが観察でき、突然の大波にチビッコも大はしゃぎをして楽しんでいます。そしていつとはなしにチビッコ達から「ビックリ水槽」と呼ばれるようになりました。（森田）